

入選 愛媛県 村上 通隆 様（60代 男性）

私は昭和55年に神奈川歯科大学を卒業して、1年間は母校に近い歯科医院に勤務しました。2年目からは郷里に帰り、愛媛大学医学部歯科口腔外科に医員として2年間勤務しました。そして昭和58年から愛媛労災病院歯科へ2年間出向しました。その後、愛媛大学医学部歯科口腔外科に戻り、昭和61年からは医学部助手になり、助手になって初めて国家公務員になりました。そして約10年間勤務した後、平成6年には再び愛媛労災病院へ歯科部長として移籍しましたが、その時の私は40歳になっていました。

最初に勤務した歯科医院では年金の加入は無く、それを知った母が国民年金加入の手続きをしてくれました。そして私が帰省した際に母から年金手帳を手渡され、「大切に保管する様にね!」と言われました。この頃は20歳以上でも学生は任意加入でした。父は映画館や公衆浴場を経営していましたので、両親は共に従業員も含めて社会人の年金加入の重要性や必要性を十分に理解していたのだと思います。愛媛大学医学部では、医員の間は厚生年金、助手になってからは共済年金になりました。愛媛労災病院では厚生年金と厚生年金基金で、その厚生年金基金は現在では企業年金連合会になっています。

私は独身のままで40歳を過ぎてしまいましたが、仕事面では愛媛労災病院歯科部長として勤務し、日々研鑽して順調に臨床経験を積んでいました。忙しく仕事に追われる毎日でしたが、充実した日々で将来については然程の不安も無く、漠然と定年まで勤めるだろうと思っていました。そして定年になったら「友人の経営している病院に就職させて貰おう」などと思っていました。「まさかの人生」が来るなんて予想だにしていなかったのですが、その日は何の前触れもなく静かに唐突に訪れました。

平成13年、私は47歳になっていましたが、少し血圧が高くて降圧剤を服用する以外はいたって健康でした。9月23日秋分の日、病院は休みでしたが午前中は病棟へ行き、午後からは病院敷地内にある職員宿舍の自宅に帰って書類を整理していました。少し疲れたので椅子をリクライニングさせて横になった瞬間に頭の中でパチンと音がしました。これが「まさかの人生」の始まりで、私はそのまま意識を失ってしまいました。脳出血を発症していて、そのまま自宅で放置されていたら死亡していたことでしょう。ところが下顎骨骨折が疑われる急患が愛媛労災病

院救急室を受診した為、救急室のスタッフや同僚医師たちが私を探していて、自宅で倒れていた私を発見してくれたのでした。本当に全くの偶然がもたらした幸運でした。意識が戻ったのは、3日後、ICUのベッドの上でした。一命は取り留めたものの右半身不随の後遺症が残りました。脳神経外科病棟に約一か月間入院した後、車椅子を使ってリハビリ病棟へ転棟しました。杖を突いて何とか短い距離を移動できる状態で、翌年2月に退院しました。利き手が使えず歯科医師への復帰は絶望的でしたが、休職期間中は職員宿舎にとどまることを許されました。4月には4級身体障害者手帳を交付され、その後も懸命にリハビリに励みましたが、やはり職場復帰は不可能でした。休職期間終了をもって平成16年に退職し、失意のどん底でアパートへ転居して独りで生活を始めました。それでも最初の一年間は失業保険給付金がありましたので経済的には救われましたが、給付終了以降は殆んど収入の無い状態になりました。

転機が訪れたのは平成18年でした。視覚障害者の友人が障害年金について教えてくれました。私は障害年金を頂けないものと思い込んでいたのですが、友人は対象になる筈だと言うので、私はすぐに年金事務所へ相談に行きました。職員の方々が親切に教えて下さり手続きをした結果、平成19年から障害年金を頂けることになりました。更にその上、身体障害者手帳を交付された平成14年にさかのぼって一括支給されることにもなりました。これは殆んど無収入の私にとって、とてもとても有り難いことでした。

私は昨年で満61歳になり、企業年金連合会からも年金を支給されることになりました。現在、障害者である私の経済的な側面は大半を年金によって支えられています。思い返せば昭和55年に亡両親が加入手続きをとってくれた国民年金への加入が私の年金人生の始まりでした。もう35年も昔のことですが、今も手元にある年金手帳を渡してくれた時の亡母の顔を思い出します。その母の眼は「これであなたも社会人よ、しっかりしなさい!」と言っていた様な気がします。それにも拘わらず、本当にまさかの人生になってしまいましたが、経済的には年金によって救われました。現状で年金支給の無い生活は想像も出来ませんが、私は経済面以外でも多くの人々に支えられて生かされています。最後に、この場を借りて皆様方の御厚情に心より感謝申し上げます。